
即興小説傑作集第三弾

物書き魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

即興小説傑作集第三弾

【Nコード】

N7978B

【作者名】

物書き魂

【あらすじ】

出された単語を使用して即興小説を書こう、そんなスレッドが「小説家になろう」秘密基地」に存在する。絶対に使用しなければならぬ単語は三つ、文字は1000文字までという極限の制限の中で生まれた豊かな作品集です。

あ（前書き）

この作品は、「小説家になろう」秘密基地」掲示板の「即興小説を書こう！」スレッドから生まれました。全ての著作権は作者様に属します。

今回の参加者さま

- マグ口頭さま（W 6 3 3 6 A）
- AKIRAさま（W 7 0 5 2 A）
- yoshinaさま（W 6 2 4 6 A）
- 更紗ありさま（W 3 2 4 5 A）
- 影之兔チャモさま（W 6 2 7 0 A）
- 松原志央さま（W 5 7 7 3 A）
- ともゆき様（S 0 0 0 3 A）
- 和成創一さま（W 8 5 8 8 A）
- 柏矢結奈様（W 4 6 2 0 A）
- 春野天使さま（W 0 5 4 2 A）
- 水音灯さま（W 9 9 3 5 A）
- 琉珂さま（W 2 6 3 2 A）
- アオキチヒロ様（W 0 1 1 3 A）
- 有葉千野さま（W 5 2 1 6 A）

作者名は各作品の冒頭に設置されています。

あ

「証明」「水芭蕉」「茜色」

有葉千野

あなたに、この鉢をあげます。これには『夢見て咲いている』という水芭蕉が植えてあります。今のあなたにピッタリの花です。

何も言わなくていいんです。夢を捨てられないんでしょう？ 忘れることができないんでしょう？ どんな夢かは聞きません。でも忘れないでください。その夢はきつと、あなたという人間が『この世界に存在する価値があつた。』という事を証明できる、ただ一つの大切な夢なのです。

苦しかったら、泣いてもいいんです。怒りたかったら、怒鳴ってもいいんです。殴られたら、殴り返してもかまわないのです。その方が、あなたらしい輝きを放ちます。そして、あなたらしく夢をつかんでください。

あの茜色をした夕日も、夜になれば沈んでしまいますが、それでもやがて朝日が昇ります。

あなたの夢も、その鉢から芽が出て、そして花を咲かす頃には、きつとあなたの夢も花開いているでしょう。

約束します。

夢を捨てないでください。

あ、ちなみにその鉢は、税込で七万五千円になります。分割なら八回払いでご購入できますが、キャッシュカードはお持ちですか？

「春」「りんご」「猫」

琉珂

今日は卒業式だけど、学校の桜は満開だった。
微かに色のついた白い花びらがちらちらと舞い、落ち、僕は少しだけ感無量。

「先輩いつちゃうね。」

右下から、一人言とも二人言ともとれる呟きが聞こえた。

由依は僕の隣に座って正門を睨むように眺めている。

僕たちは小学校から今まで一度もクラスが離れたことがないという奇跡に近い腐れ縁だ。

「そうだなあ。」

由依がどうして「先輩たち」と言わなかったのかを知ってる僕はぼんやりとそう返した。

卒業式はしょっぱなから脱け出してサボっている。

にゃん、と何かが足元で鳴いた。
見ると、それは案の定猫だった。

「ああ、リンリン。」

由衣が猫を抱き上げる。

「リンリン？」

「名前。先輩と世話してたんだ。」

「何でリンリン？」

「先輩が初めに持ってきた餌がリンゴだったから、リンリン。」

「僕とうとう会えなかったんだけどさあ、その先輩って頭大丈夫なの？」

「だっ、大丈夫に決まってるでしょ！」

何を考えたら猫がリンゴを食べると思うんだろう。

僕が頭を撫でようと手を伸ばしたら、リンリンは首を振って桜の方へ走っていつてしまった。

白い地面に立って、にやんと小さく鳴く。

「桜も何でこんな日に咲くかなあってリンリンは言ってるんだよ。」

「はあ？」

「まだ春にもなつてのに咲くなんて、お祝いしてるみたいじゃん。先輩の卒業をさ。」

全部切り倒してやりたいと、由衣は中々の危険思想を口に出した。何を考えてるのか知らないが、先輩を持って行くのは正門でも桜でもないんだぞ。

僕はそう教えてやる代わりにまたそうだなあと返事した。

春になるうがなりまいが、僕と由依は離れそうにない腐れ縁なのだ。それはどうでもいいこともあるけど、素晴らしいこともある。にやんと鳴いたリンリンはまるで、春を間違えた桜を愛でているようだった。

END

「ジャージ」「化粧水」「椿」です
マグロ頭

通された更衣室で開いたロッカー。深緑で統一された、いかにも高校生が着る様なジャージが目に入った瞬間、速攻で閉めた。

ロッカー間違えたかな？

確認した番号は言われた通り。ロッカーは間違っていない。

崩れ落ちそうになった。どうやら俺はあれを着ねばならないらしい。あの女の笑い声が想像できて、俺は泣きたくなくなった。

あいつ、ぜってえSだ。精神的DSに違いねえ……。

嫌な予感はある。罰ゲームだからと連れてこられた店前では、くねくねしたおっさんに熱烈な歓迎を受け、この前の部屋では初めて化粧水をつけられたのだから。

最後はこれかあ……。手にとったジャージを見る。名札に『椿』とあった。

「椿ちゃん、いきなり四番様がご指名よ」

不意に店内から顔を見せた『加織』さんが俺を呼んだので、もう自棄になって、俺はジャージを着た。

初仕事で即指名っていうのはどうなんだろう。複雑な感情を胸に、女の子にさせられた俺は、出来れば知らずにいたかった世界へ踏み出し始める。

父さん母さんごめん。俺、コスプレオカマバーで働く事になった。ま……。

それは、冬のある夜のお話。

『恥』『オムライス』『お日様』

春野天使

「もー！ ダメでしょ、マー君！」

出張先の小さな食堂で、若いママが小さな男の子を叱っている。

「ケチャップでお絵かきしちゃダメっていつも言ってるでしょ」

男の子の前のテーブルには、オムライスが一つ。男の子はちっちゃな手でケチャップの容器を握ってる。

「やだ！ ボク、いつもオムライスにはお日様の絵を描くんだもん」
男の子のオムライスは、ケチャップで描いたお日様で真っ赤だ。

俺はちよつと恥ずかしい気持ちになりながらも、自分のテーブルの上のオムライスを見つめる。

三十過ぎてオムライスを注文するのもなんだが、俺は出張先では必ずオムライスを食べている。で、あの男の子と同じようにケチャップでお日様の絵を……。

苦笑いしながらも、俺はお日様の部分をスプーンですくって口に含む。うまい！ お日様のオムライスを食べると仕事も上手くいく。恥ずかしくて妻には言えない、俺のげんかつぎだ。

り

「リボン」「犬」「葉書」

更紗ありさ

「葉書買ってこい」

「はあ？」

春が近付いても相変わらずダルそうな同室者が、そう俺にお願いした。……むしろ命令した。

遠く離れた家族に手紙を出そうとする態度には感心する。だがこの寒空の下、外に出るなんて真っ平ごめんだ。

「自分で行けよ」

「やだ。寮の売店は売り切れだったし、太郎と遊ばなきゃいけないし」

そう言って、愛犬太郎の頭をわしゃわしゃと撫でる。だが、俺も巖として譲らない。

「良いか、この寒空ではしゃげるのは犬だけだ。俺は人間だから無理」

「ああ……『犬は喜び、庭を駆け回り』ってやつ？」

「そ」

だから自分で行ってくれと繰り返した俺に、彼はとても嬉しそうな表情を見せた。何か良い事を思い付いた、子供みたいな笑み。

「分かった！」

そうして太郎の首輪に、小銭入れとメモをくくりつけ、最後にリボンで固定する。

——何だか、物凄く嫌な予感がした。

「おい、お前……」

「行け！太郎！葉書を買ってくるんだ！」

「お前が行けよ！」

——結局、太郎のつぶらな瞳に負けて俺が寮を出たのは、それから三十分後の事だった。

「風邪」「鮭」「学校」

春野天使

「ハックション！」

学校を出たとたん、私は大きなくしゃみをした。見上げた空は冬模様。チラチラと粉雪が舞っていた。

私は足取りを速めて、家へと急ぐ。もうすぐ高校入試なのに、風邪なんてひいてられない！

「おかえりー」

家に帰ると大学生の兄がいた。学校はもう冬休み。家でゴロゴロしてるばかりだから、たまに鬱陶しく思う。

「ハックション！」

兄の目の前で、また、大きなくしゃみをした。

「あつ、お前風邪ひいたんじゃないか？」

そう言いながら、兄は台所へ行く。

「来いよ。今から兄ちゃんがいいもん食わしてやる」

「いいもん？……」

私は胡散臭く思いながらも、風邪でだるくて言い返すのも面倒。素直に兄について行く。

「ジャーン！ どうぞ！」

私の目の前には、ドンブリに入った鮭茶漬けが置かれた。鮭フレークがたっぷりのったお茶漬けは、兄の好物だ。

「これで風邪治るぞ」

「……？ 鮭茶漬けで風邪が治るなんて聞いたことないよ」

「治るって。これ、兄ちゃんの愛情たっぷり茶漬けだから」

私は軽くため息をつきながら、兄の鮭茶漬けを食べてみる。割と美味しい。一緒にのったたくわんのお漬け物も良い感じ。

「兄ちゃんも鮭茶漬けで風邪治った」

私は温かいお茶漬けをサラサラと食べる。結構優しいところもあるじゃん。

「風邪って人にうつすと治るとも言うよな」

私はお茶碗を置いて、パジャマ姿の兄を見る。兄は屈託のない顔して笑ってた。

「……」

兄の風邪は完全に治ったみたいだ。

「雛あられ」「ハンカチ」「ウグイス」

マグロ頭

ウグイスが伸びやかに歌う昼下がり。僕は軒先で寝転がっていた。春眠暁を覚えず。まさにその通りだ。もう昼だから的確ではないけれど、いい陽気なのだ。風がそよぎ、花々が薫る。何処までも穏やかで伸びやかな一日。春爛漫ここに極まれりとは、まさにこの事だろう。

ああ、気持がいい……寝てしまいたい……寝てしまおうか……寝てしまおう。

だらけきった体は、いとも簡単に睡眠を欲した。仕方がない。こればかりは本能の欲求だから。

眠気に勝てず、目を閉じた。その瞬間、背後で盛大な音がした。

「ちよつと、ミーたん。ダメでしょ、雛あられをたおしたら」

振り向いたその部屋には、保育園に通う妹と小さな黒猫。そしてせっかく飾ってあったのが台無しになってしまった雛あられ。おや、何故かハンカチもある。

「もー。あたしがたづけなきゃいけないのよ！」

「ご立腹らしい妹は、黒猫に姉の様に接していた。対する黒猫はおとなしく叱られている。少しうんざりしているみたいだが……。」

妹の小言は少し続いたが、片付けに入っただのを見計らって、黒猫は僕の方へ歩み寄ってきた。

『……堪らないよ。目隠したのは誰だって話だ』

低く、神秘的な声。何を隠そう、黒猫もとい、死神ミネルハルバイトの声だ。ちなみに女性である。

『はーん。ミーたんは目隠されて、イジメられてたのね。通りで雛あられにぶつかっちゃったわけだ。ん、でもミーたんなら目隠しされたところで、そんなに障害にはならないでしょうに』

口には出さず、考えただけ。でも、ちゃんと返事はくる。

『当たり前だ。私を誰だと思っている。……しかし、沙希のしたかった事は、私がぶつからなければ、出来なかった事なのであろう？』

僕は驚いた。あの厚顔無恥で自分至上主義だったミーたんが、こんな思い遣りをもっているとは知らなかったのだ。呆けた顔をしていた僕を見て、ミーたんは恥ずかしそうに付け加えた。

『……私も、この家で好くしてもらっている。その、だから、時には恩返しをしてみないと駄目かなと思ったのだ……』

優しい言葉。初めて聞く事が出来た。僕は今日という幸せな一日に微笑みを浮かべた。

「おいでミーたん。一緒に昼寝をしよう」

うららかな春の陽射しが僕らを包む午後の一時。

が

『桜』『蝉』『レール』

影之兎チャモ

蝉の抜け殻を見つけたのは、まだ桜も咲かない二月のことだった。僕はあまりに季節外れなそれを驚愕しながら手に取り、光に翳す。中身はどこに行ってしまったのだろう、そんな疑問を浮かべていると、今にも消え入りそうな鳴き声が聞こえてきた。居場所を探すも、広い世界から三センチもみたくない体が見あたるはずもない。なんでこんな季節に目覚めてしまったのか、鳴き声はただ一つ、切なげに木霊する。まるで、大人が敷いたレールの上も歩けなかった、自分のようじゃないか。

「6720番！」

号令をかけられて、仕方なく男は蝉を探す目を閉じた。

「受刑番号6720番、いま行きます！」

男は叫ぶように答えると、蝉の鳴き声を背にして走り出した。季節外れの蝉はまだ、鳴いている。

「車」「洗剤」「湖」

水音灯

空は青く、涼やかな風が吹く。絶好の洗車日和だ。

毎日のように乗り回している車を、スポンジで丁寧に磨いていく。前回の車検先がサービスしてくれた洗剤は、自分で買っていた物よりずっと泡立ちがいい。洗車をしているという実感がわく。今回限りで捨ててしまうのが、もったないくらいには。

「あなた、三時のおやつはどう？」

「ああ、ありがとう」

でも今はいいよ、と続ける。

窓の中から顔を出した美咲が、残念そうな顔で、そう？　と言った。

「卓也が幼稚園から帰るまでに磨き上げておかないと」

明日のドライブに間に合わないだろう？

そう返せば、途端に笑顔に変わる。

美咲の妊娠をきっかけに結婚してから三年。まあ上手くやれている、と自分でも思う。

「明日が楽しみね」

そうだね、と笑いながらスポンジを動かす。

久しぶりの連休だ。

ドライブを楽しみながら、湖に行こう。

レジャーシートを広げて、湖畔でバーベキューをしよう。

そう告げたのは一ヶ月ほど前のことだ。

休みも予約も予定通りに取れ、明日は晴れだとラジオが言う。計画は、順調に進んでいる。

汚れていたミラーを綺麗に拭きながら、通りかかったお隣の奥さんに挨拶をした。

明日は湖に遊びに行くんです、と言えば、いいわねえ、と奥さんが笑う。そうして話しているうちに、退屈だったのか奥さんの娘が繋いでいた手を離して駆け出して。待ちなさい、と言いながら、奥さんも坂道を下っていった。

ああ、完璧だ、と思いながら、私は車を洗い続ける。明日、妻と息子とともに、湖に沈める予定の車を。

「ネジ」「自由」「カーテン」

琉珂

明日から期末テストだというのに、一限目から気乗りしない授業。窓際の席でシャーペンをノックしながら先生の話をも右から左に聞き流していると、何かがコチンと落ちてきた。

小さなネジだった。

一体どこから。

あたしは上を見上げてああと息を吐く。

ネジはカーテンを吊すサッシを壁に繋ぎ止めていたネジだった。

もともと緩んでいたものがとうとう落ちてきたんだろう。

役目を放棄して自由の身になったネジは少し錆びていて、鈍い色合い。

あたしはシャーペンを置いて卓上のそれを拾い上げ。

そつと窓を開けた。

隙間から微かに風が流れてくる。

あたしは目を細めて、手の中のネジを遠くへ投げた。

飛んでいったネジはすぐに見えなくなる。

じゃ、元気でやりなよ。アンタは自由だ。

人知れずこっそりエールを贈ったあたしは、丁度そのとき頭上からミシミシと不吉な音を聞いた。

見上げて、またああと息を吐く。

カーテンを支える仕事から自由になりたいのは何もネジだけじゃないみたい。

授業中にも関わらず無言で席から立ち上がって、アルミのサッシが

あたしの机に落ちてきたのはそれから数秒後の話。

「電柱」「白桃」「眼鏡」

春野天使

あたしは度のきつい眼鏡をかけると、自転車に飛び乗った。目指すはスーパー。いざ、出陣！

猛スピードで自転車を漕ぐ。

何故って、あの高級白桃の缶詰が一個五十円なんだから！ 白桃って缶詰の中でも高い。安売りなんて滅多にしないの。

それにそれに、あたしは白桃が大好き！

開店前のスーパーに列を作って並び、開店と同時に押し寄せるおばさん連中のパワーにもひるまず、なんとか白桃の缶詰を三個ゲットした！ もっと欲しかったんだけど、お一人様三個限りだったの……。

嬉しさで舞い上がりながら家路へ急ぐ。ペダルを踏む足に力が入る！ ついつい入りすぎてしまった……。路地から飛び出して来た子猫に気付かず、あたしは避けようと必死でハンドルを切った。

キキキーン！ ガッシャーン！

凄まじい勢いで、あたしは電柱に激突した。怪我をしなかったのが奇跡みたい。けど……自転車のハンドルは曲がり、あたしの眼鏡は無惨にも砕けた……。

あたしは泣きそうになりながら、曲がった自転車を押し、ぼやけた視界でどうにか家に辿り着いた。でも、あたしには白桃の缶詰があるから！ 白桃を食べられたら幸せよ。

しかし……その幸せは無惨にもうち砕かれてしまった。あたしは当分白桃の缶詰を食べることが出来ない。その缶詰はパッカンじゃ

なかった。あたしの家には缶切りがない。

眼鏡も自転車も使い物にならないし……あたしは絶句し、声をあげて泣きじゃくった。

「苺」「鞆」「タンポポ」

アオキチヒロ

学校の帰り道、黄色のハンカチを広げたように大量に咲き乱れるタンポポの群れの中で、ソレはいた。

「雀、だな」

「うん」

怪我をして動けなくなった雀が、タンポポに隠れるようにして震えていた。

彼女はそれをそつと両手で包んで、出来る限り優しく抱き上げた。

「イチゴ」

「え？」

「名前、苺にする」

口数の少ない彼女らしく、何故そんな名前を付けたのかだなんて理由は一言も話すことなく、ただ一言そう言つて真つ白なハンカチで雀を包んだ。苺の血が少し滲んだにも関わらず、彼女は気にすることなく包む。

「どうすんの？ 苺」

「持つて帰る」

そつと鞆の中に、苺をいれる。チュン、と鳴き声が聞こえた。

「苺、元気？」

一週間ほど経った頃だった。久しぶりに彼女の家へ遊びに行くと、籠の中で飛び回る苺が居た。

「元気」

「みたいだな。すつげえ飛んでるじゃん。そこまで回復したんだ？」
こくりと彼女が頷く。

「良かったじゃん。これならすぐに外へ返せるな」

「……返す？」

首をかしげ、彼女が鸚鵡返しに聞いた。

「そ。返すんだろ？ 飛べるようになったから」

その言葉に、彼女は何も答えなかった。

ただ、何かを思い詰めたように鳥籠の中を睨んでいた。

次の日。案の定、莓は居なくなっていて。

彼女は大きくもなければ小さくもない庭で、空になった鳥籠を持つて立っていた。

「大丈夫？」

ふるふると首を振る。

莓は？ と尋ねると、同じように首を振るだけで。

「そっか。とりあえず中に入ろう」

そう言っ、彼女の背中を押す。ふと振り返ると、庭の木の傍に、不自然に盛り上がった跡を見つけた。

隣で鳥籠を抱きしめる彼女の爪は、何故か土で汚れていた。

と

「広辞苑」「ドア」「猫」

春野天使

——あー、いたいた。また夢中になって広辞苑を読んでる。

わたしはドアの隙間に手をかけて、そーと彼の部屋に入っていく。仕事熱心なのはいいけど、熱中しちゃうといつもわたしのこと忘れちゃうんだから。

彼は作家。今もパソコンの前に座り、必死で広辞苑をめくっている。ネット検索すればいいのに、やっぱり広辞苑がいいんだって。

わたしは甘えた声を出して、彼の膝に手を伸ばす。

「あ、ミーコ……やばい、朝ご飯まだだったな。昨日は徹夜で書いてたからさ……」

彼は眠そうに欠伸する。新米作家さんは色々大変でしょうけど、わたしのご飯は忘れないでね。

「ミヤー！」

黒猫のわたしは、ちょっと膨れて彼の広辞苑の上に飛び乗る。ご飯をくれるまで、見せてあげない！

「マリオネット」「子犬」「メロン」

マグロ頭

俺はマリオネット。壁に掛けられた名もない人形さ。でも、ただの人形じゃない。真正銘の魔道具なんだ。俺には自我がある。傷も自己修復が出来るのさ。

だけど、苦手なものもある。俺、死んじゃうから火とかはダメ。

そして、この家にいるあの生物だけは無理なんだ。

ああっ！ 言ってた側から奴が現れたよ！ 廊下からのっそり現れたよ！

お、恐ろしい……。何であんなに太ってるのだけれうか？ まだ産まれて三ヶ月なんだろう？ それなのに何、そのメロンの様な体つきは。異常じゃない。って言うか、お前は本当に子犬なのか？ 地球外生命体じゃないのか？

あっ、止める！ 俺をじつと見るな。また俺をその口の中でくちやくちゃしたいんだろ！ 嫌なんだよあれ。勘弁して下さい！

えっ？ おい、こら人間。俺を壁から取り外すな！ あら、チロルちゃん、この人形で遊びたいの？ とか吐かすな。ああ、ホントにヤメテ！ 臭いの。臭いのよこいつの口の中！

あっ、投げられた……。アイツ尻尾振って構えてるよ……。ホント、無理……。誰か助けて……

『シャンプー』『床板』『てんとう虫』

柏矢結奈

あの日、僕は足を怪我をして道端でうずくまってたんだ。痛くて痛くて、一人で泣いてたんだ。みんな無視して、蹴飛ばそうとする人すらいたんだ。

君だけだったんだよ。立ち止まって、僕を見てくれたのは。爽やかで甘いシャンプーの薫りがほんのり漂ってきて、僕は恐る恐る顔をあげたんだ。そこに、笑顔の君がいた。

僕を家に連れてつてくれて、部屋とご飯を用意してくれた。毎日僕に話しかけてくれた。すっごく嬉しかったあ。

そこで穏やかな時間を過ごすうち、僕は君を好きになってった。怪我もずいぶんとよくなったし、部屋を出て君に楽しい話を聞かせてあげたいよ。いろんな所に遊びに行きたい。ずっとここにいたいよ。

だけど、僕はもう行かなくなっちゃ。もう大丈夫、怪我は治った。小さな部屋の隙間をかくぐり、目の前にある庭の見える大きな廊下まで歩く。端っここの、床板の最先端まで行って、背中を震わせ空を仰ぐ――。

君は泣くだろうか。僕を探すだろうか。だけど僕は行くよ。ごめんね……――僕は所詮ちっぽけな、ただのてんとう虫だから。

「カラス」「ショートケーキ」「昔話」

春野天使

「お母さん、早く、早く！」

「お腹空いちやった！」

「早くちょうだい！」

子供たちの目の前には、真っ白なショートケーキが置かれている。それは、苺のショートケーキだったはずだが、上にのっかっていた苺はなくなっていた。

「お待ちなさい、子供たち。今、みんなにわけてあげるわ」

母親はそう言って、眩しいくらいの白いケーキを見つめる。

「ケーキを食べながら、昔話をしてあげましょう。真っ白なカラスのお話よ」

「真っ白のカラス！？」

子供たちは驚いて丸い目を一層丸くしました。

「カラスは黒いんじゃないの？」

「違うの。昔のカラスは白かったのよ。でも、白い羽ではつまらな

いから、おしゃれなカラスは色とりどりの羽を使っておしゃれをしたの。赤や黄色や青色の羽」

「わあ、スゴイなあ。僕もそんな羽になってみたい」

「でもね、坊や。白いカラスは、あまりにたくさんの色の羽を使つたから、最後には黒い羽になってしまったの」

「へえ、だから、カラスは真つ黒な羽になつちやつたのかあ。欲張りすぎたんだね」

「でもね、黒い羽は一番素敵なのよ」

「どうして？」

「黒い羽は全ての色を集めているから、もう他の色に染まることはないの」

母親はそう言って、自慢げに自分の真つ黒な羽を広げてみせる。

「全ての色を持っているから、こんなに黒く輝いているのよ」

「そうなんだあ」

「よかったね、僕達みんな真つ黒な羽で」

七羽のカラスの子供たちは、楽しそうにさえずり、大きな口を開けて、母親のカラスがついばむショートケーキを順番に食べさせてもらった。

う

「マッチ箱」「じゃんけん」「チーズ」

琉珂

彼女はたどたどしい動作でマッチ箱からマッチを取り出して、床の
蝋燭に火をともした。

真つ暗な部屋に赤い光が揺れる。

私の赤い首輪の色もその光に照らされて赤く揺れる。

「どうやったら影に勝てるかな。」

彼女は呟いてそつと開いた掌を握った。

すると彼女の掌の影も当然のように拳を握る。

私は与えられた一欠けのチーズを緩慢に食みながら、部屋の片隅で
それを見ていた。

彼女はまた掌を開く。

影もまた開く。

そのうち蝋燭が倒れて木製の床に火が燃え移った。

私は危険を察して大きく尻尾を振るけれど、彼女は勝負に夢中で気
付かない。

仕方なく外への出口である引き戸の隙間に身をねじこみ、私はもう

一度彼女を呼んだ。

危ないわと。

それでも彼女は気付かない。

私は広がる炎があまりに恐ろしくて、ついには彼女を置いて逃げ出
してしまった。

後ろから物置が燃え上がる音がした。

朝になればきつとあそこはケシズミに。

幼い彼女はそうなくてもなお、崩れ落ちたガラクタの下で終わらないじゃんけんを繰り返し続けるのでしょう。

所詮飼犬の私にはどうしようもないことだけれど。

「花瓶、杖、指輪」

柏矢結奈

暗い部屋の中を、手探りで歩く。電気はつけない。彼女の悲しむ顔は見たくないから。

なぜこんな事になってしまったのだろう。私は今でも君が大好きだ。一緒にいたいだけなのに。

部屋の奥のベッドの上に、目を瞑った彼女がしとやかに座っていた。キラリと光った薬指が切なかった。

ああ愛しいデイジー。こんな事になったのも、全部私のせいだ。すまない…責任を持って、君を元の姿に戻す。

「……君は私を恨むかい？」

私はデイジーの前に立ち、その端正な顔に杖を突きつけた。彼女は反抗しなかった、そっと目を開き私を見た。

「いいえ。私は愛するあなたを側で見守っていられるだけで、幸せです」

私は唇をキュツと噛みしめ、こみあげる感情を奥へ押し込めると、杖一振りした。明るい光がデイジーを包みこんだ——私は目を見開いた。光に照らされた彼女は、微笑を浮かべていたのだ。幸せそうな表情で私を見つめたまま、彼女は静かに消えていった。

私があげた指輪が、儚い音を立て床に落ちた。

私はそれを見つめ、がつくりと腰を落とし膝をついた。そして指輪ではなく、その横に落ちていた花を手にし、側にあった花瓶に挿した。

朝が来て太陽があがり、窓から柔らかな光が射し込むのと同時に、愛らしい花はめいっばいに開いた。

知らず溢れた大粒の涙は、朝露のようにキラキラとデイジーの花を美しく輝かせていた。

「イカダ」「数字」「罨」

マグロ頭

罨を仕掛けた。小さな小さな悪だくみ。想いのこもった希望の光。君を初めて知ったのは、真夏の修学旅行。沖縄の澄んだ海にイカダを浮かべようとみんなに呼び掛けていた。総勢十人程で作り上げた頼りないイカダは、広い海原の真ん中で君と一緒に沈んでしまっただけで、楽しそうな笑い声は見事作り上げたんだ。

季節は変わって初秋。残暑残る遠い空の下。大きな歓声と応援と、熱の入った競技の数々。体育祭は最高の一日だった。君が最後尾でもらったリレーバトンを、歯を食い縛って先頭まで持っていた時、初めて胸の鼓動に気が付いたんだ。

風が雪を纏う冬。いつの間にか君も受験生の顔になっていた。椅子にじっと座っているなんて大嫌いのはずなのに、君はいつも一番最後まで鉛筆を走らせていた。だからだね。掲示板に君の数字を見付けたあの笑顔があんなに輝いていたのは。私もすごく嬉しかった。

そして桜の咲く頃。私たちは卒業を迎える。中学生という中途半端な時間が終りを告げた。

……でも。

罌を仕掛けた。君の靴箱。小さな手紙をそつと置いてきた。桜の木の下。君を待つこの心は、あの夏の日に決まっていたんだ。

『竹刀』『ケーキ』『猫又』

春野天使

「めーん！」

私は野良猫に向かって、竹刀を振り下ろした。猫の額まで後一センチの所で竹刀をとめる。不意をつかれた猫は、悲鳴のような鳴き声をあげると走り去っていった。

「野良猫め！」

「美香ちゃん、さすがだね。県大会優勝の腕前はスゴイ」

友達の亜紀は感心して私を見る。私は竹刀を下ろすと、フーとため息をついた。

「モンジロウがもつと強かったら、野良猫なんかすぐに追っ払ってくれるんだけどねえ」

私は飼い猫のモンジロウを見下ろす。彼は、居心地悪そうに、すごすごと私の前を横切って行く。モンジロウはもうじいちゃん猫。猫との喧嘩よりお昼寝を好んでいる。その上、甘い物好きだから、最近お腹が出てきてデブ猫と化してる。

「わっ、美香ちゃん！ この猫しっぱが二つに分かれてるよ！」

突然、亜紀がビックリしたような声をあげた。元々ノラだったモンジロウは、拾って来た時からしっぱが二つに分かれていた。他の犬か猫に噛まれたか、事故にでも遭ったのかもしれない。

「前からだよ。そんなに驚かなくても」

「この猫、かなり年とってるでしょ！？」

亜紀は目を見開いたまま、モンジロウを見つめている。

「うん、何歳かは分からないけど、家に来て十年以上は経ってる」

「美香ちゃん！ この猫は『猫又』だよ！」

亜紀は悲鳴に近い声で叫んだ。

「猫又？ 何、それ？」

「猫の妖怪よ！ 尾が二つに分かれてて、年をとってるの。人間の言葉を話して……そして、人を食い殺してその人になりすまして生きるのよ！」

「……そんな、馬鹿な」

亜紀はホラー好きだから。私は呆れるが、亜紀は恐ろしい物を見るようにモンジロウを見ると、そのまま慌てて帰って行った。

「この臆病なモンジロウが妖怪なわけないでしょ？」

私はモンジロウのしっぽを軽く引つ張る。モンジロウは立ち止まり、チロツと私を見上げた。確かに、尾は二つに分かれてて、年にくってるけど、その後の話しはね……。

「それよりお腹空いた。ケーキでも食べよう」と

亜紀と一緒に食べる予定だったケーキを私は思い出す。モンジロウのしっぽを放し、私は台所へ向かう。後からモンジロウも早足でついてくる。こういう時は動作が機敏だ。もしかして、モンジロウ私の言葉が解ったのかな？

『ケーキですって！？ 美香さん、一人食いはいけませんぜ』

ふっと声が聞こえた気がして、私は振り返る。モンジロウは甘えた声を出してピツタリと私の後を追っていた。

私を見上げたモンジロウの顔が、ニヤツと笑っているように見えた。

っ

『新人』『雷』『鞆』

有葉千野

とある新聞配達バイトの新人。彼は早く仕事を切り上げたかった。なぜなら、上空の雲行きはとても怪しく、今にも雷が落ちそうだからだ。新聞は残り一枚、これを配ればノルマは達成。あとは売上金を入れた鞆を上司に渡せば、今日のバイトは終わりだった。そして顧客の郵便受けに、最後の新聞を入れようとした、その時。激しい雷が轟き、辺りは豪雨に包まれた。ずぶ濡れは嫌だと、新人は急いで会社へ戻った。彼が会社に到着すると、早速、上司が鞆を要求してきた。新人は手元を探ると、なぜかそこには、配ったはずの新聞があつた。郵便受けに入れたのは、新聞では無く鞆だったのだ。そして新人に、上司の怒りの雷が落ちた。

『隻影』『少女』『紺』

琉珂

私は部屋の隅に掛けられた紺色の制服を眺めていた。きつちりと胸の真ん中で結ばれたスカーフ。長すぎると言っても過言ではないスカート。

もう今はいない彼女が着ていたものだ。

彼女は学校が突き付ける規則という規則を全て守る、私にはとても真似できない優等生だった。

そのためスカートを短く切ったりして規則を破っていた私は、彼女の親友として釣り合わないといよく先生達に非難された。付き合うのをやめると。

しかしそんな非難さえ、私には彼女との信賴の証であつたのに。
彼女はもういない。

こうやって彼女の部屋で彼女の制服をいくら見つめても、彼女はもういないのだ。

私の記憶に唯一残る彼女も、時と共に薄れゆき、いつしかその隻影すら望めなくなるだろう。

私はそれが恐くてたまらない。

あのいつでも自分に誠実であつた少女をこの世界から消してしまうのが。

ああ、奪われるが私の命だつたら良かったのに。

私数滴の涙といくつかの嗚咽をもらして、この悲劇に浸っている自分に気付いた。

「梅」「暇」「髪」

マグロ頭

昼下がりの図書館。過ごしやすにも関わらず、人がまばらなその場所で、伊月は暇を持て余していた。本には目もくれず、頼杖を突いて、脳内に増殖し続ける『暇』という文字を眺めている。

暇だ。暇暇暇暇。暇過ぎる。暇過ぎて死ぬ。むしろ死にたい。

こんな暇地獄、無理。

伊月が一番苦手な事、それは待つ事だ。人気店の行列に並ぶだとか、新作の商品を待つたとか、そういった事が全く出来ない。待つくらいなら違うものを食べるし、今あるものを買う。出来る事があるなら、そちらに流れてしまふのだ。伊月は非効率的な事が大嫌いだった。

でも、そんな伊月にもやらなくてはならない時がある。待たなくてはならない時があるのだ。

……クッソー、千草の奴。あたしが本に興味ないのを知ってて、

あえてここを待ち合わせ場所にしゃがって。悪魔だ。鬼だ。畜生だ。糞馬鹿阿呆に決まってる。あー……クソッ、早く来いよなボケ女。チツ……イライラする！

貧乏揺すりをし始めてしまった伊月の周りに負のオーラが漂い始めた。周りの利用者がとても居心地悪そうにしている。伊月の吊り上がった目と固く結ばれた唇、そして短く切った髪型は、それだけで見る人に威圧感を与えてしまうのだ。不機嫌なのが目に見えて分かる今、ちよつとした舌打ちに恐怖を感じる人も少なくない。誰もが現状打破を望んでいた。

その時、春風が梅の甘い香りを入り口から運んできた。新作のシヤンプーの香り。そして千草お氣に入りの香り。甘酸っぱいその香りに伊月は溜め息をひとつ吐くと、入り口に立つ人影の方を向いた。長い黒髪に向日葵の様な笑顔。脳天気な小悪魔が手を振っていた。「……遅いよ、千草」

苦笑を浮かべて、伊月は席を立つ。ついさっきまで感じていた些細な苛立ちは、そこに置き忘れたままにして。顔の前で手をあわせる千草が今日はどんな話を話してくれるのか楽しみにしながら。

『合格』『紙幣』『自転車』

春野天使

「あつた〜！」

僕は思わずその場でジャンプする。東の空が白み始めてきた。吐く息も真っ白で凍えるように寒い。この喜びは、志望校に合格した時と同じくらい、いやそれ以上に大きかった。

僕はピンセットで小さな紙切れをつまむと、ビニール袋の中に入れた。

小さな紙切れ……それは、大切な一万円札の最後の一切れだ。家に帰れば、ここ数日拾い集めた紙幣の紙切れがある。最後の一切れ

だけ、なかなか見つからなかった。紙幣の三分の二が残っていれば、新しいお札と交換出来るけど、僕は最後のひとかけらまで見つけたかった。

疲れた。もうこりごりだ。あんな宣言するんじゃないかった。僕は、フーと大きく息を吐いて自転車に乗る。

『もし、。。。高校に合格したら、皆の前で一万円を紙吹雪にすればらまいてやる!』

僕はクラスメイトの前で、大宣言してしまったのだった……。まさか、あの名門校に合格出来るとは考えてなかった。

「ま、いいか。志望校に合格出来て、一万円も元に戻ったんだし!」

僕は声を立てて笑うと、朝日が差し始める中、勢いよく自転車を漕ぎ出した。

！

「梅」「ラジオ」「チョコレート」
ともゆき

♪ 明日は特別、スペシャルデー ♪

ラジオから「バレンタイン・キッス」が聞こえてくる。
明日はバレンタインデー。

私は彼に手作りのチョコレートをプレゼントするためにキッチンに立っていた。

お鍋でお湯を沸かしてチョコを湯煎で溶かす…。と、ここまで作って私はふと考えた。どんな形を作るうか、と。ハート型じゃ一般過ぎるし、かといって複雑な形はできないし…。

そこまで考えていて、私はチョコをボールのように丸める事を思いついた。

色々大変だったけど、何とか丸めることができて、お気に入りのボンで袋を結んだ。

「はい、バレンタインのプレゼント」

私は彼に袋を渡した。それを見て彼は一言。

「…なんだこりゃ、梅干か？」

そりゃあ私は不器用だから上手くボール型に丸められなかったかもしれないけど、そんな言い方はないでしょう？

百年の恋も冷めてしまう思いだった。

「カメラ」「ミニスカート」「ピアス」

柏矢結奈

駅のホームを跳ねるように駆けてゆく。大きな鞆を肩に担ぎ、猛然と走るその男らしい姿に、似合わないミニスカートをはいたその少女は、発車音の鳴り響く電車に乗りうと階段をかけ登っていた。

『カシャッ』

背後でカメラのシャッター音が聞こえた気がした。あくまでも、気がした、だけ。けれども少女は迷うことなくそのほっそりとした足を――よく見ると意外に筋肉のついた足を、頭上高く掲げ、ああっ中身が丸見え……いやいやゴホン、背後にいた男めがけて振り降ろしたのだ。

少女のピアスが片方飛んだ。そしてコンクリートの地に細やかな音を立てて落ちた。けれどその儚い音は、少女の踵落としをくらった中年男の倒れる大きな音にかき消されてしまった。

少女は男が落としたカメラのフィルムを取り出し、思いきり踏み潰した。その勢いで担いでいた鞆の紐が緩み、中に入っていた胴着のようなものがちらりと見えた。

「くっそじじい！試合完全に遅刻じゃん！！」

無情にも走り出す電車の音を聞いた少女の、泣きそうな叫び声が駅構内に響いていた。

「楽園」「迷路」「値段」

ともゆき

今から15年以上前、日本がバブル景気の真っ只中だった頃、全国各地にいくつものテーマパークが作られた。このテーマパークもそのひとつで巨大迷路が売り物だった。しかしバブルの崩壊とともにこのテーマパークも客が激減し、先日とうとう閉園となってしまった。

そのパークの解体工事のため、私はそこに来ていた。

工事関係者しかいないパークで私はその巨大迷路を見下ろしていた。あの頃私は高校生だったが、よく友達とこのパークに遊びに来て巨大迷路に何度も挑戦したものだっただけ。

私は方向音痴だったのだろうか、結局一度も攻略できないまま終わってしまったが、あのときはまさか将来自分がこの解体工事に関わることになるとは思わなかったが、あの時、ここで過ごした思い出はとても値段がつけられるものではないだろう。

例えばパークがなくなろうとここは私の青春の思い出とともに永遠に心に残る楽園なのだから。

「野球場」「バス」「月」

マグロ頭

川沿いに整備されたちよつとした広場。雑草の青臭い臭いが漂うそこが奴が言った勝負の場所、つまり、奴らにとっての野球場だった。

……冗談じゃない、こんな場所。グラウンドの乾いた緊張感も、辛い照り返しもない。気の緩んだ奴がお遊びで野球をするのがやつとだ。間違っても、俺の様な本気で野球をする奴がピッチングする場所じゃない。

……来なければよかった。

あまりの環境に、俺はすぐにバスに飛び乗り、家に帰りたくなった。家で自主トレがしたい。いつものコースを黙々と走りたい。そんな考えが浮かぶ。

「おい、何ぼけーっとつつ立つてんじゃ。早う、ご自慢の豪速球つつーのを投げてみい」

声がして、俺は前を見た。およそ十三メートル先、満月のように真ん丸な顔。奴がしゃがんでいた。俺の球を捕ると豪語した、勝負の相手。

「さあ、早う早う！」

そう言って軽くミットを叩く。

いいだろう。俺は意を決して、奴のミットだけに集中する。すると、さつきまで頼りなかったミットが突然腰を据えたではないか！ やってやろうじゃないか！

「約束」「車輪」「チヨコレート」

和成創一

『約束通り、車輪でチヨコレートを作って待ってるわ』

まるでお題小説で失敗したみたいに不自然な文章。

しかもピンクの便箋に流麗な草書体である。

言葉の真偽よりむしろ人間性を疑うが、差出人が私の尊敬する先輩、丹蒜^{ニハル}さんなら話は別だ。彼女は大のミステリファンで、よくこつした謎めいた手紙を送ってくる。

私は記憶を総動員した——「約束」と「車輪」で方位の隠語、チヨコレートはバレンタイン……“2”月の行事だから、2の方向は

「先輩ん家の方じゃない」

拍子抜けしつつ向かう。庭にいた先輩はせつせとリムでチヨコを

すり潰していた。

リムⅡタイヤを取り付ける金属製のリング。

チョコⅡ食べ物。

「……何してんですか」

「見ての通りよ。そしてあなたは私の誘いにまんまとかかった。いけないわ。暗号はその裏の裏まで読み取らないと」

「むしろ文面そのままの気が」

「いいのよ。私たち女の子同士なんだから、少しぐらい奇抜な方が慰みになるわ。相手がいないのに真面目に作ってられるものですかそれに、ちよつと楽しいわよ」

「どれどれ……む、これは。なかなか、大変、ですね」

「でしょう？ 暗号も恋も、苦労しなければ駄目ってことよ」

「なるほど。勉強になりました！」

……アレ？

「自転車」「銅像」「マフラー」

春野天使

あなたはいつものようにクールな眼差しで、じっと本に目を落としている。雪が降ってきそうなくらい寒いのに、いつもと同じように薄着ね……。

真面目で無口なあなた。でも、あなたはいつも私の側にいてくれて、私を置いてどこにも行かない。

私が振られた時も、ずっと側にいてくれた。泣きながらふられた彼のことを未練がましく話しても、嫌な顔もせずじっと私の話を聞いてくれた。

……本当に聞いてくれたのかな？ あの時もあなたはズーと本を読んでいたので、聞いてくれたかどうかは分からない。本当にあな

たは本ばかり読む勉強好きなんだから。

でも、良い。毎日、自転車で会いに来るね。これ、あなたにプレゼントする。彼のために編んだんだけど、あなたにあげる。今度は、あなたのために編んであげるね。

私は自転車の籠から手編みのマフラーを取りだして、彼に巻いてあげた。

彼は出身小学校に建っている「二宮金次郎」の銅像……。二宮金次郎がある学校って少なくなっただけど、ここにはまだあるものね。

銅像の彼は私の初恋の相手。ずっと、ずっとここにいて、どこにも行かないでね。

！（後書き）

即興小説傑作集第三弾、いかがだったでしょうか？ 心に残る作品があつた、という方は作者様の名前を添えて感想を送ってくださいね。もし作者様が小説家になろう登録済みでしたら、作者様個人のメールフォームなどにどうぞ。

即興小説シリーズは今回で最後になりますが、即興小説の活動は現在も「小説家になろう」秘密基地」のみんなの掲示板にて行われています。傑作集には収録されていない作品もありますので、ぜひご覧下さい。参加もお待ちしております。

それでは、今回参加していただいた方々のご紹介を最後に添えさせて頂きます。

- マグロ頭さま (W 6 3 3 6 A)
- AKIRAさま (W 7 0 5 2 A)
- yoshinaさま (W 6 2 4 6 A)
- 更紗ありさま (W 3 2 4 5 A)
- 影之兎チャモさま (W 6 2 7 0 A)
- 松原志央さま (W 5 7 7 3 A)
- ともゆき様 (S 0 0 0 3 A)
- 和成創一さま (W 8 5 8 8 A)
- 柏矢結奈様 (W 4 6 2 0 A)
- 春野天使さま (W 0 5 4 2 A)
- 水音灯さま (W 9 9 3 5 A)
- 琉珂さま (W 2 6 3 2 A)
- アオキチヒロ様 (W 0 1 1 3 A)
- 有葉千野さま (W 5 2 1 6 A)

ご協力、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7978b/>

即興小説傑作集第三弾

2010年10月10日05時03分発行